

[[花の美術展]によせて]

田能村竹田筆「翰墨隨身帖」の 山茶花図について

田能村竹田(安永6[1777]～天保6[1835])は、豊後国(大分県)岡藩出身の画家で、江戸時代後期を代表する文人画家の一人にあげられます。詩書画に優れ、しばしば旅に出て各地の文人・名士たちと交流を育きました。晩年には「船窓小戯帖」(重文・個人蔵)、「亦復一楽帖」(重文・寧楽美術館蔵)など、小画帖の名品を描いたことが知られます。大和文華館所蔵の田能村竹田筆「翰墨隨身帖」(以後、本画帖と記す)も、縦23.0cm 横15.4cmの小さめの画帖で十二図が収められています。十二図に続いて竹田の跋があり、馬関(下関)の美しい景色を称えた上で、この小画帖が篆刻家の「弘賢兄」のために描いたもので、十二図に押された印は弘の刻したものであることが述べられています。「時癸巳穀雨前三日」と年紀があり、癸巳とは天保4年(1833)、穀雨とは二十四節気の一つで旧暦の三月中であることから、本画帖は天保4年3月頃に制作されたと考えられます。天保3年9月に竹田は弟子の帆足杏雨と共に豊後国より京阪へ向かう旅に出ますが、その途中、関11月から翌4年の3月にかけて下関に滞在していました。竹田の見聞録『屠赤瑣々録』巻六(天保3～4年に整理)には下関の人「弘廬峯」が古鏡を見せてくれたことが記されており、本画帖を贈られたのは、この「弘廬峯」であると考えられています。竹田と親しかった医師・小石元瑞が竹田没後間もない天保6年の冬に跋を寄せており、その跋にも本画帖が「廬峯所蔵」であることが記されています。また、同年7月に同じく竹田と親交のあった儒家・篠崎小竹が題字を寄せています。

本画帖に収められている十二図は、蟹図が四図、石図が四図、靈芝図が二図に、芦薈図と山茶花図です。ここでは、特に「山茶花図」(図1)に注目してみたいと

思います。十二図全てに竹田の自賛があり、そのうちの十図の賛には明・清の画家や木村兼葭堂など、先人の画風に倣って描いたということが述べられていますが、「山茶花図」はその例外の一つで、客のくれた美しい山茶花を余暇に描いたものであることが賛(「有客来、贈山茶花、花大而深紅、嫣然媚然対人欲語、読書余暇戲写其真」)から分かります。清楚な翠色をした青磁瓶に紅色の花が一輪挿されており、穏やかな肥瘦のある墨線で花卉のヒラヒラとした輪郭が象られ、紅色の濃淡で柔らかな質感が表現されています。黄色の葉は優しくカーブを描きながらふっさりと描かれ、先端部にはわずかに緑青が施されています。葉は墨で輪郭線を描かず、水気のある深緑色でしっとりと表されています。「山茶花図」の瑞々しく麗しい表現からは、竹田が贈られた花の姿を愛で楽しんで描いたことが伝わってきます。

花を愛でることは文人のあるべき姿の一つですが、竹田も日頃より花に親しんでいました。自宅の北壁に開けた窓から見える庭には梅から菊までの四季の花々を植えており、また京阪滞在中には頼山陽・雲華などの友人たちと花見に出かける様子がしばしば記録に残されています。竹田の花を描いた作品には、枝先のみを描いたものや地面に咲く様子を描いたものの他に、「山茶花図」のように、瓶に花を挿したものもあります。瓶などに花を入れて飾ることは古くから行われており、日本では室町時代以降に「いけばな」として成立します。中国では文人の室内のしつらいとして花は欠かせないものでしたが、特に明時代以降に盛んになり、明時代後期には花論書が出版され、明から清時代にかけては瓶花図や瓶花が飾られた邸内図が多く描かれています。明末の文人・袁宏道の記した「瓶史」(万暦28年[1600]刊)は日本でも元禄9年(1696)に出

版され、そこに謳われる自由で清新な瓶花は、江戸時代の日本の文人たちに大きな影響を与えます。竹田も影響を受けた一人であり、「瓶花論」という書物を著すほどでした。この『瓶花論』では、花の品格・折取・位置、瓶の大小などが論じられています。

瓶に挿した花を描く竹田作品には、文政6年(1823)6月に頼山陽より贈られた蘭に竹枝を添えた「蘭竹図」(図2)や、天保4年(1833)の元旦に、昨年末に買ったばかりの青磁瓶に梅を挿した姿を描いた「瓶梅図」(図3)など、本画帖の「山茶花図」と同じく実際に目にしたものを描いた作品が残されており、竹田が花の姿や花瓶との取り合わせを楽しんでいる様子が窺えます。「瓶梅図」に描かれる青磁瓶は周文の絵とともに下関で竹田が買ったもので、二歩二朱で手に入れた古青磁であることが画賛や妻宛の竹田書簡から分かっています。「瓶梅図」と「山茶花図」は天保4年の1月と3月頃と近い時期に描かれており、どちらにも青磁瓶が用いられていますが、その形状は異なります。首が細く胴も細長い「瓶梅図」の青磁瓶に対し、「山茶花図」の青磁瓶は首が太く、胴部が短くぶつくりと膨らんでいます。すんなりと天に向かって伸びる梅枝には細長い青磁瓶がよく似合い、枝が短くふつ

くらと大きく花を開く山茶花には背が低く丸味のある青磁瓶がよく似合っています。竹田は『瓶花論』において、花が小さく、瓶が大きいものは全く趣きがなくなると記しており、花と瓶の大きさのバランスに気を配っていたことが窺えます。旅先ですが様々な花を飾れるようにいくつもの青磁瓶を所持していたのか、または贈られた山茶花にちょうど良い大きさ・形の花瓶を逗留先の知人に借りたのか、想像が膨らむところです。(宮崎も)

(図2は『日本美術絵画全集25 木米／竹田』集英社、1977年より、図3は『大分県先哲叢書 田能村竹田 資料集 絵画篇』大分県教育委員会、1992年より複写しました)

図2



図3

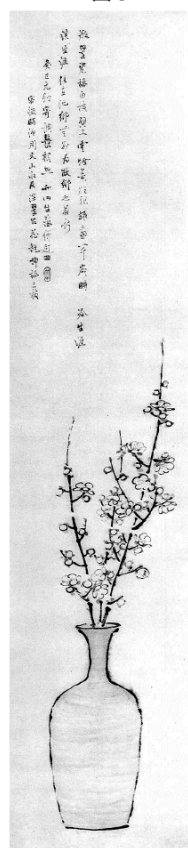


図1

